

あそびあいては
おばあさん

木島始作
梶山俊夫画

岩波書店

913 あそびあいてはおばあさん

木島 始 作

岩波書店 1972

132 p. 21 cm

小学4,5年以上

あそびあいてはおばあさん

定価一四〇〇円
(本体一三五九円)

一九七二年四月七日 第一刷発行 ©

一九八九年九月一八日 第五刷発行

作 者 木島 始 きじま はじめ

画 梶山俊夫 かじやまとしお

発行者 緑川 亨

発行所 101東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

株式会社岩波書店

電話〇三―二六五―四二一 振替東京六二六二四〇

本文印刷 株式会社三陽社

製本 株式会社松岳社

表紙・見返・箱印刷 錦印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

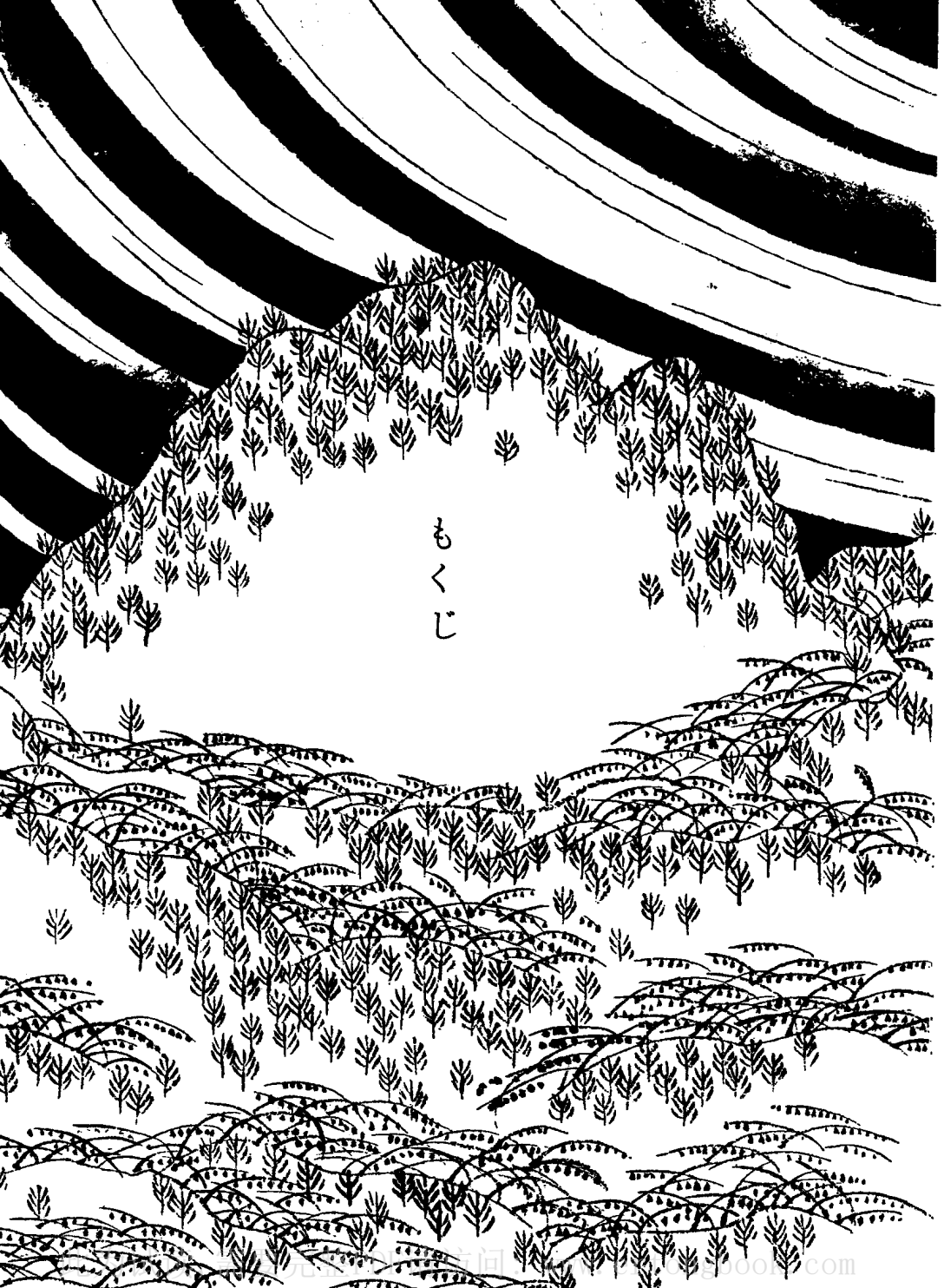
ISBN4-00-110461-X



あそびあいては
おばあさん

木島 始 作
岩 波 書 店





もくじ



花^{はな}あわせ……………9

美^{うつく}しいくし……………27

カラスのゆめ……………45

ウミボウズじいさん……………59





梶山俊夫画

風のふく日のるすばん……………75
 とおい太鼓とながみ耳……………91
 ホタルの歌……………109





あそびあいては
おばあさん

梶山俊夫 画

木島 始作

はな
花あなせ



カオルの泣きかたは、消防自動車のサイレンみたいでした。

わっうーん　わっうーん

カオルが、あごをしゃくりあげて、大声で泣きだすと、かまってくれるのは、おばさんだけでした。

「まるで火事みたいね。」

カオルがあずけられたおばあさんの家では、カオルが泣きだすと、そう言われたものです。

わっうーん　わっうーん

泣声が、消防自動車のサイレンみたいに大きかったし、おまけに、カオルが顔を

真赤にして泣いたので、それで「火事みたい」と言われたのでしょう。

台所からやってきたおばさんが、カオルをだきあげ、笑わせようと思いました。

「だるまさん、だるまさん、にらめっこしましょ……」

それでも、カオルは、泣きつづけました。

わっうーん　わっうーん

カオルが、いつまでもそう大声で泣きつづけていると、もうだれもかまってはくれませんでした。

ほんとうに、カオルのあいてになつてくれたのは、おばあさんだけでした。

おばあさんは、だれよりもカオルと遊んでくれたのです。

大声あげて泣いていたのが、いつのまにか鼻をすするだけの泣きべそになり、それから、きやつきやつ笑って遊ぶようになっていったときのことを、カオルは、大きくくなってからもよく思い出しました。

カオルが、めちゃくちゃに泣きじゃくり、それから、おばあさんに遊んでもらうようになりだしたのは、こんなふうにしてでした、――

おかあさんが、ふいに病気で入院してしまった日、おとうさんにつれられて、カオルは、電車にのって、バスにのって、それから歩いたり、おんぶされたりして、おばあさんの家にやってきたのです。その日、つかれてぐっすりねむり、目をさますと、おや、まくらがちがう、おや、ママがいない。そのうえ、おとうさんもいない！　こことは、どこなんだろう？

そう思ったときには、もうカオルは、泣きだしていました。

わっうーん　わっうーん

おばさんは、台所のかたづけや洗濯でいそがしいし、おじさんやおじいさんは仕事にでかけてるし、いとこのクニハルは学校へ行っているし、だれも、おばあさん

いがいに、カオルにかまってくれるひとは、いませんでした。

おばあさんは、カオルの手をひっぱって、庭^{にわ}にでて、ちょうど咲^さいていたキクの花を切^きってくれました。

「これ、さあ、花^かびんにいけようね。」

おばあさんが、そう言^いっても、まだやっぱりカオルは、わっうーん、わっうーん、としゃくりあげて泣^ないていました。

おばあさんは、しかたがないので、ひとりでキクの花を花^かびんにいけ、それから、カオルのほうをむいて、こう言^いいました。

「いろがみ、おるかね？」

カオルは、首^{くび}をよこにふって、あいかわらず、わっうーんと泣^な声^{こゑ}をたてるのでした。

「あ、そう、そう、それじゃ、いっしょにおやつをつくらうね。おばあさんのもみじ焼^やきは、おいしいよ。」

おばあさんは、そう言^いって、台所^{だいどころ}からなにかもってきました。

カオルが、何をするのかしら、と思^{おも}っている、おばあさんは、大きなすり鉢^{ばち}に小麦粉^{こむぎこ}を水でとかし、卵^{たまご}をわったり、バターや黒砂糖^{くろざとう}をいれたりして、それからすりこぎで、それをこねだしました。

「ちょっと、なめてごらん。」

おばあさんが、そう言^いって、黒砂糖^{くろざとう}のかけらを、カオルにくれました。カオルは、なめてみて、おいしい甘^{あま}さなので、びっくりしました。それで、わっうーん、わっうーんのしゃくりあげた泣^なきかたは、おしまいになり、くしゅん、くしゅんの泣^なきべそになりました。

「さあ、これを、もみじのかたちにつ^つてごらん。それから、こんがり焼^やいたら、おやつのできあがりですよ。あっ、たいへん、ふくらし粉^{こな}をいれるの、忘^{わす}れてたねえ。」

おばあさんは、あわてていたようです。それから、おばあさんとカオルは、ふた

りでたくさん、おやつやつのクッキーを焼やいたのです。カオルは、もみじ焼やきというおばあさんのことばが、じつはよくわからなかったのですが、こねた粉こなを、大きなお星ほしさまのかたちかたちに作つくってみました。

カオルは、おばあさんに、すこしなつきだしていました。でも、まだ、そのもみじ焼やきのおやつを、作つくってかじっているころは、カオルの泣なきべそは、おしまいになっなっていませんでした。せっかくおばあさんとふたりで作つくったクッキーが、泣なきべそのために、カオルにはすこし塩しほからく感かんじられたのです。カオルが、じぶんでじぶんのおやつを作つくったのは、このときがはじめてでした。

カオルが、いよいよもう泣なきべそをかかなくなったのは、おばあさんが、たんすの高い引出ひきだしから、ちっちゃな花ふだの箱はこをとりだして、それを見せてくれたからでした。

「わあ、きれいっー」

「これで、あそぼうか？」

花あわせ